

答 申 書

「地域の教育力を向上するための方策について」

はじめに

近年、青少年をめぐる様々な問題が発生している背景として、家庭の教育力の低下とともに、地域における地縁的なつながりの減少、近所付き合いの希薄化などによる地域の教育力の低下があると指摘されている。

地域の教育力が低下したとされる要因として、社会全体の子どもや親子連れに対する寛容度が低下し、子どもを受け入れる懐の深さを失ってきていることが挙げられる。しかし、地域社会の中で親や教師以外の「第三の大人」に出会うことは、子どもたちが社会性を育む上で大変重要である。

入間市教育委員会では「豊かな人間性の育成」の基本理念のもと、生涯学習の推進により培ってきた知識・技術のノウハウ等を、地域社会の様々な分野に活かすまちづくりを目指しており、本社会教育委員会議において、「市民と行政の協働によるまちづくり」の理念を基本とし、地域の実情に呼応した『地域の教育力を向上するための方策について』審議することとした。

なお、以下の視点から具体的且つ実効性のある取組を目指すこととした。

- (1) 豊かな人間関係ができる地域づくりの方策について
- (2) 地域の人材を還元できる環境づくりの方策について
- (3) 確かな人間関係を育む世代間交流の方策について

1 入間市の現状と課題

平成15年に策定した入間市青少年健全育成指針「元気ユースプラン」に続き、平成19年4月家庭教育支援リーフレット『子どもの育ち・支えあう元気な入間』を作成した。その中には、子どもの発達段階に応じた地域社会での取組が示されている。特に、子どもや親を支える地域の力については、具体的な取組として、「あいさつを交し合う」「魅力ある地域活動を創出する」「地域の様々な団体の活動を活性化する」ことが、子どもの育ちを後押しすると記してある。

地域の教育力については、以前から全国的に低下が指摘されているが、入間市市民意識調査報告書(平成18年3月)においても、地域によって差はあるものの、全体的には地域活動への参加者が減少する傾向が明らかになっている。

つまり、入間市においても、地域コミュニティが失われつつあり、個人化が進み、互いを思いやる人間関係や助け合いといった地域の機能が低下している。

以上のような実情から、かつて周囲の大人や子ども同士の関わりの中で自然

に育まれてきた子どもの社会性も、現在では、意識的な働きかけ無しにはその育みが厳しい状況にあると言える。そこで、子どもの育ちのために地域が担ってきた機能・役割を取り戻すために、再び地域の大人（親、教師以外の大人）と子どもとの関わりを意図的に創り出す必要がある。

現在、入間市で行われている地域の教育力を活かした取組として、

- (1) 通学合宿
- (2) 学校支援ボランティアによる環境・生活・学習支援
- (3) 元気な入間っ子を育てる地域支援事業
- (4) 地域教育フォーラム

等があげられる。

しかし、第12回いるま生涯学習フェスティバルで実施した「地域と子ども部会」放課後の子どもたちアンケート報告書（平成18年12月発行）によると、

- ① 異年齢間の子どもの遊びが失われつつある。
- ② 遊びは家の中が中心（TV、ゲーム、携帯、パソコンなどの機器との接触時間が長い）

というデータが出ており、日常的に地域の人と関わりを持って育っていく子どもの姿は見えてこない。

さらに、「車両や不審者から子どもたちを守る安全安心の遊び場が必要である」と多くの親たちが自由意見に書いている。つまり、現在までの取組では十分でないと考えられる。

一方、地域の大人側の意識であるが、前出の市民意識調査（平成18年）では、子どもたちのために地域が果たすべき役割への回答として

『社会ルールを守ることを教える』が最も多く

「積極的に関わるべき」 61.5%

「ある程度関わるべき」 36.7%

合わせると98.2%となっている。

続いて『人を思いやる気持ちを育てる』が多く

「積極的に関わるべき」 49.3%

「ある程度関わるべき」 46.1%

合わせると95.4%となっている。

項目全体にわたって、地域の大人は子どもたちに関わるべきとの回答が80～90%近くを占めている。つまり、市民の意識の中には「地域の大人は子どもたちにより一層関わるべき」との認識があることが判る。

法律においても教育基本法の改正（平成18年）により一段と地域の教育力の重要性が示されている。

第13条（学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力）

学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。

第16条 3項（教育行政）

地方公共団体は、その地域における教育の振興を図るため、その実情に応じた教育に関する施策を策定し、実施しなければならない。
と、教育行政の積極的な取組を奨励している。

2 地域の教育力を向上するための方策について

諮問内容の（1）豊かな人間関係ができる地域づくりの方策について（2）地域の人材を還元できる環境づくりの方策について（3）確かな人間関係を育む世代間交流の方策については、重複・共通することから、それぞれの取組の中で、課題解決していくこととした。

○地域づくりの始まりは、まずあいさつから

地域の教育力の向上は、地域内に顔見知りをつくり、人と人をつなげることから始まると言える。そのためには、声を出して交し合う「あいさつ」が大切である。あいさつの習慣は、家庭で躰けられるべきものであり、家庭内で親と子があいさつを交し合うことをまず奨励すべきである。一方で、市全体でも「あいさつが大切」との共通認識を持ち、地域のコミュニケーションづくりを目指した「地域ぐるみのあいさつ運動」に取り組むことも必要である。

具体的な地域での取組として、あいさつの習慣づくりを促進するため、地域の人の目に触れる「あいさつバッジ」の装着、幟旗の設置、チラシ配布等の取組や、あいさつの意識を向上させるための「あいさつの日」、地域の商店街や企業などの協力を得ての「あいさつ重点ロード」等の設定も考えられる。つまり地域に住む多様な立場の人を巻き込んだ人間関係づくりを図るべきである。

防犯パトロール活動やPTA活動を通じた地域での大人同士のあいさつ運動も、子どもを見守る安全安心な地域づくりの推進につながることから奨励したい。

更に地域の大人や指導者があいさつの重要性を認識し、共感を持ってこの運動を進めていくためには、講演会・講座の開催や情報紙等を通し、大人の意識向上を図る必要がある。

○豊かな人間関係を育む遊び場づくり

子どもが豊かな人間関係を育むためには、自然体験、社会体験が大切である。これらの多くは、遊びを通して行われることを大人は再認識すべきである。心

と身体を使い五感で感じる体験、ぶつかり合いや失敗も含めた様々な経験を通して培われる自主性、責任感、判断力、思考力、社会性は、その後の人生を切り開いていく上で、大切な糧となる。

子どもが遊びを通して様々な体験をするためには、地域の中に「遊び場」が必要である。入間市には公園が多数あるが、前出の「放課後の子どもたちアンケート」では、「安全安心な遊び場がない」という市民の声が多く出されている。つまり、公園があっても遊び場がないと感じられているのである。したがって「子どもにとっての魅力的な遊び場とは何か」について再考する必要がある。

理想的な子どもの遊び場を考えたとき、そこには子どもの遊びを見守る「地域の眼」が必要である。この「地域の眼」を育てることは、子どもに関心を持つ大人を増やすことであり、地域の教育力の向上につながると考えられる。

そこで、遊び場からつながる地域づくりに取り組みたい。

まず、子どもの遊び場は、想像力と創造力を膨らませることができ、自主性、責任感が培われる場でなければならない。そのためには、「自らの責任で遊ぶ遊び場」「自主性・自発性が尊重される遊び場」が必要である。現実的には空間や時間に制約が伴うが、寺・神社・公園等、現在地域の中にある場所・空間を活用し、工夫していくことが望ましい。

次に、遊びを見守る大人の存在、プレイリーダー・コーディネーターの必要性が挙げられる。プレイリーダー・コーディネーターは子ども同士、そして大人と子どもをつないでいく役割を担う人であり、「遊びの面白さを子どもと共有できる」「地域の顔・地域の人に顔が広く、人と人のつなぎ役になれる」等の資質が求められる。

続いて、学校の施設についても子どもの遊び場として更なる活用が可能である。現在行われている土・日曜日の体育館・校庭の開放のみでなく、平日の運用なども考慮に入れ、地域の人を巻き込んだ遊び場づくりの取組を進めたい。

更に、入間市には、子どものための活動拠点として充実した施設である青少年活動センターがある。現在は、児童・生徒の活動を中心に利用されているが、今後、子どもに関わる活動団体の大人の拠点施設としても、より一層活用されることが望ましい。そのためには、現在17歳までとしている青少年の対象年齢等の見直しを検討されたい。

○地域と共に在る学校

入間市の宝である子どもを育てる場としての学校は、家庭・地域とともに大変重要な教育の場である。一日の中で多くの時間を過ごすため、子どもにとって「心のふるさと」になる。また、自分の住んでいる地域の学校には、誰もが愛着を感じるものであり、地域の教育力の向上には、学校もまた大きな役割を

果たすべきである。

現在、社会環境の変化により、地域とのつながりを持たない孤立した家庭が増加しており、それが家庭の教育力低下のひとつの要因と指摘されている。個性溢れる子どもたちや親への対応、家庭環境の問題解決は学校だけでは対処しきれない。学校の努力に加え、地域とのより適切且つ効果的な連携の仕組みづくりが求められている。

まず、社会規範は、学校と地域が共通の認識を持って子どもに伝えていくべきであり、そのために大人は常に子どもの目を意識し、自ら率先して行動すべきである。

また、地域の中での子どもの生活の姿は、学校と地域が密に連絡を取り合い、情報を共有していくべきである。

次に、地域の人材の活用も有効である。現在、授業において、地域の大人が学校支援ボランティアとして活用されている。例として、読み聞かせ、給食、調理実習、実験、総合学習などがある。また、授業以外では、子どもを守る安全パトロールや学校環境・美化に関わるボランティア活動等が行われている。学校は地域に求めることを具体的に発信し、地域はその求めに積極的に応じていくべきである。

更に、高校・大学も地域の一員として、小中学校との連携や交流等を推進し、地域全体で子どもと学校を支えていく体制を整えることが望まれる。

続いて、学校は地域の住民の生涯学習活動の成果を活かせる場としても期待されている。学んだことを学校に活かせることは、学校への関心を高め、地域の教育力の向上に貢献すると考えられる。

最後に、地域と共に在る学校を考える時、教員と地域の人々とのつながりもまた、ひとつの重要な要素であると考えられる。さまざまなボランティア活動や、学校・地域の行事等を通して、教員と地域住民が顔見知りになり、互いの信頼関係を築き、子どもを通してつながっていくことが、地域と共に在る学校を考える上で望ましい。

○地域コミュニティとしての公民館

地域は、人材の宝庫である。人が集い、つながり、活動する場である公民館には、性別、年齢、世代や職種を超え、多種多様な人が来館するため、地域コミュニティの核としての役割を担っている。つまり、公民館には地域の人材情報が集まっており、地域の教育力の向上のため、公民館が果たすべき役割を考えたい。

まず、職業や生涯学習で培った学びや技能・技術、経験を地域に還元できる力を持った人材を地域または地域の学校に活かせるよう、情報の収集、管理、

組織化・システム化を進めることが求められる。

次に、コミュニティの核としての役割を果たすべく、乳幼児・児童・生徒や勤労世代等、現在利用の少ない年齢層に対しての企画・講座を含め、地域の教育力の向上を考慮した事業に取り組むべきである。その際には、市民へのサービスの提供のみに終わらない企画、つまり、「市民と行政の協働によるまちづくり」を目指した事業を展開し、協力者を増やしていくことが重要である。現在、公民館で行われている通学合宿など、地域の人と人とを結びつないでいく異年齢交流の取組は、更なる充実が図られていくことを期待したい。

上記の目的の達成のため、公民館は、「人」「情報」「団体」をつなぐコーディネーターの役割を果たすべきである。そのためには、専門的な知識を持った職員を配置するのが望ましい。

おわりに

子どもを育む地域の教育力の向上は、家庭・学校・地域の三者の協働の上で達成可能である。そのために常に前向きに工夫と実践を繰り返していくこと、互いに連携し協力していくことが肝要である。このことを共有し、入間市全体で取り組まれることを望む。

子どもが子どもらしく健やかに成長できるよう、市民一人一人が子どもの成長を願い、それぞれの役割と責任を果たせるよう、行政として有効な施策を展開していくことを切望するとともに、社会教育委員もその一翼を担っていきたい。